植物の専門家から見た北海道の今(1)
～豊かな自然を観光資源としてみては

東　隆行（あずま　たかゆき）

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教

1971年、北海道川上郡弟子屈町生まれ。東北大学大学院理学研究科で植物分類学を学び、学位を取得。北海道農業試験場非常勤研究員、北海道大学農学部COE博士研究員を経て現職に就く。絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会維管束植物分科会委員。

はじめに

今回、知り合いの先生の紹介で、北海道の植物の話を本誌でするよう依頼を受けました。そこで、植物をあまり知らない人のために、北海道の植物一般の話をしようかとも思いました。しかしながら、北海道には植物の先生が何人もおられ、また植物をよく知っているアマチュアの方も数多くいらっしゃいます。そんな中で、植物の専門家なら誰もができる話をするよりは、ここはあえて、20年以上にわたって北海道の様々な地域の植物を調査してきた私ならではの話を、２号にわたって紹介しようと思います。植物がお好きな方も、そうではない方も、しばしお付き合い願います。

美しい車窓風景が見られる大楽毛（おたのしけ）・コイトイ海岸

夏休みに「特急おおぞら」に乗って釧路に旅行したことがあったら、白糠（しらぬか）から釧路に向かう海岸沿いに、赤、紫、黄色など色とりどりの花が咲いているのを、見たことがあるでしょう。JR根室本線と並行して国道38号線が海岸沿いに走っているので、車から見たことがある人もいると思います。釧路市大楽毛から白糠町コイトイにかけての東西約７kmにわたる海岸は（図１）、地元では美しい花が咲くことが知られており、昔は家族で花を摘（つ）みに来る姿がよく見られました。2010年に北海道大学の学生とこの地域を調査した際には、合計で184種の維管束植物*1を記録しています。

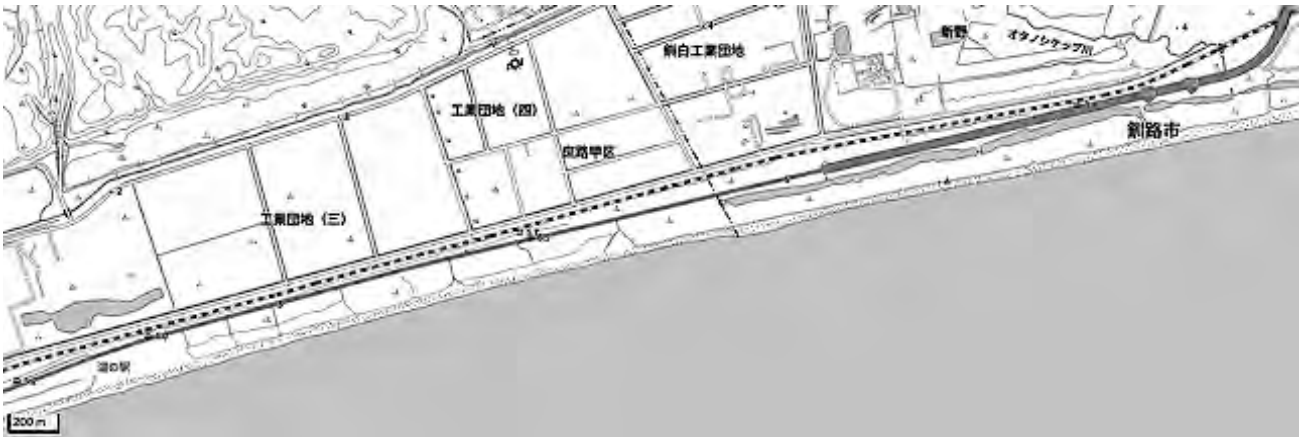

図１　大楽毛・コイトイ海岸（国土地理院電子データより）

＊１　維管束植物
茎の中に通道組織（維管束）を持つ植物。シダ植物、裸子植物、被子植物がこれに該当する。

特色ある植物種

海岸のほぼ中央にある道の駅より西側の、JR根室本線と国道38号線に挟まれた所では、６月になるとスズランの白い花（図２）、それに続いてセンダイハギの黄色の花が目立ちます（図３）。７月に入ると黄色のエゾキスゲ、みかん色のゼンテイカ（エゾカンゾウ）、濃い橙色（だいだい）のエゾスカシユリ（図４）、青紫色のヒオウギアヤメ（図５）、白色のオオカサモチ、赤色のハマナス（図６）などの花が目立ち、８月には薄紅色のエゾフウロ（図７）、黄色のオミナエシ、青紫色のツリガネニンジンの花が咲きます。歩いて注意深く観察すると、小さくかわいい花を咲かせるチシマセンブリ、ハナイカリ（図８）、エゾコゴメグサのほか、絶滅危惧種のヒロハノカワラサイコ、エゾナミキ、バアソブ（図９）も見つかります。なぜ、ここではこんなに美しい草花がたくさん生育しているのでしょうか？昔、この海岸では牛馬の放牧が盛んに行われていたそうです。牛馬はヨシ、ススキなどのイネ科植物を好んで食べその繁殖を抑えるので、代わりに上にあげたような美しい花を咲かせる植物が増えていったのです。

国道38号線を東に進んで行くと、左にカーブしてJR根室本線をまたぎます。その手前にある、海岸に入る小道を進んで行くと、水が溜（た）まっている所があります。ここでは水生の維管束植物に分類されるミズハコベ、サジオモダカ、コウキクサのほか、湿地に生育し黄色い花を咲かせるヤナギトラノオが見られます。

図２　６月にたくさんの白い花が咲くスズラン

図３　黄色い花が目立つセンダイハギ

図６　紅色の花が美しいハマナス

図７　薄桃色の花が美しいエゾフウロ

図４　橙色の花が目立つエゾスカシユリ

図５　青紫色の花が目立つヒオウギアヤメ

図８　船の碇のような花のハナイカリ

図９　絶滅危惧種のバアソブ

さらに海岸に向かって歩いて行くと、絶滅危惧種のムラサキベンケイソウに加え、普通は高山に生育し道東では湿地にも見られるコケモモが生育しています(図10)。記録によれば、コケモモと同じような分布を示すガンコウランもここに生育していたようです。釧路地方の低地は、寒流の千島海流（親潮）の影響で特に６、７月に海霧が発生しやすく、気温の低い日が続くことで知られています。この霧と気温の低さが、本来コケモモやガンコウランが生育している高山と同じような環境になるため、釧路地方では湿地や海岸にこのような植物種が生育できると考えられています。

この地域でJR根室本線より北側の部分は、釧白工業団地としてほとんどが開発されましたが、わずかに自然が残された自然観察公園の周りでは、６月に絶滅危惧種のフタマタイチゲが白い花を咲かせます（図11)。記録によれば、やはり絶滅危惧種のハナタネツケバナも生育していたようでした。

私は以前にイギリスとアメリカのそれぞれの研究者から頼まれて、次号でも紹介する大樹町の歴舟(れきふね)川など北海道の数カ所を案内したことがあります。彼らは樹木を目的に来ていたのですが、すべての地点を案内し終えた後、どこが一番興味をひかれたか聞いてみました。すると驚いたことに口をそろえて、木本(もくほん)植物はハマナスなど数種しかないここ大楽毛・コイトイ海岸と答えたのが印象的でした。海外の研究者から見ても、ここの植物は魅力的なのです。

図10　釧路地方では湿地や海岸に生育するコケモモ

図11　絶滅危惧種のフタマタイチゲ

競艇場外券販売所・メガソーラーによる自然破壊

コロナ禍がいったん落ち着いたある日、私は車で先述で紹介した大楽毛・コイトイ海岸を通りましたが、その風景を見て愕然(がくぜん)としました。巨大なソーラーパネルが、あろうことか花が最も美しく咲いていた、道の駅の西側に集中して建設されていたのです（図12)。現在もまだ整地が進んでいて、さらに増えそうな勢いです。また海岸の中央部、白糠町の東端にあたるところには、競艇場外券販売所が営業を終了した後、長期間にわたって放置されています（図13)。むき出しになったコンクリートの隙間には外来植物が入り込み、荒れ果てた廃墟(はいきょ)が本来の美しい自然風景を台無しにしています。このような現状を、読者の皆さんはどう思いますか？

図12　国道と線路の間に設置されたソーラーパネル

図13　白糠町東端にある競艇場外券販売所跡

2018年９月に胆振東部を震源とする大きな地震がありました。この時は北海道内の全域が停電して、復旧するまでの２、３日の間電気が全く使えなかったので、覚えている人も多いと思います。この地震の後から、各地に巨大なソーラーパネルが建設されました。温室効果ガスの二酸化炭素を排出しないエネルギーで電気を作り出すことは、持続可能な私たちの生活を守っていく上でとても重要なことと思います。しかし、廃墟を取り壊してそこにソーラーパネルを設置することもせず、二酸化炭素を消費して光合成をする植物を建設のために駆逐することは、本末転倒ではないでしょうか。

観光資源としての提案

廃墟となった競艇場外券販売所は1994年に建設され、営業を終了したのはそれからたった５年後の1999年でした。このギャンブル事業の失敗を教訓にすることもなく、数年前には釧路がカジノ誘致に手をあげましたね。私は経済学者ではなく、いくらの投資でいくらの経済効果が見込まれる、というようなことはわかりません。しかし、ギャンブル事業に経済の活路を求めるよりは、先述のエピソードのように海外の研究者から見ても魅力的な自然環境を、観光資源として活用する方が、自然にとっても人間にとってもずっと健全だと思います。

そこで、大楽毛・コイトイ海岸の自然をこれ以上破壊することはやめにして、特色ある植物を観光資源として活用することを提案します。競艇場外券販売所の廃墟は、取り壊して駐車場にし、木道の遊歩道を設置して特色ある植物を観察できるようにしてはいかがでしょう。国道38号線を挟んだ廃墟の向かい側には、JR根室本線の単線を走る列車の退避所としての機能を有する東庶路（ひがししょろ）信号場があります（図14）。ここに乗降用のホームを設けて、夏季営業限定の原生花園駅とすれば、ここに観光スポットがあることが知られるようになるでしょう。観光地としては大楽毛方面にある水産加工場の臭いの解消が課題ですが、高山植物のコケモモが生育しているところまで遊歩道で行けるようになれば理想的ですね。

実際に、オホーツク海に面した小清水町の原生花園は、夏季はJR釧網本線の列車が停車し、観光シーズンには団体バスが乗り入れ、多くの観光客で賑わっています（図15）。大楽毛・コイトイ海岸と小清水原生花園には、お互いに他方では見られない植物種も生育しているので、双方を見て回るツアーが企画されることになれば喜ばしい限りです。

図14　東庶路信号場を通過する特急おおぞら

図15　原生花園駅に停車する釧網本線の列車